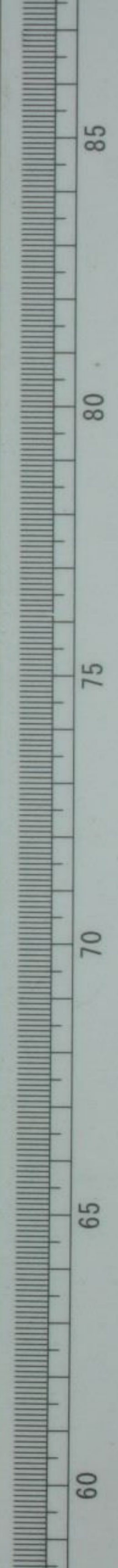


扁額軌範
二篇附錄

千 4
181
5止



寛文二年とあり

花編小澤ら如く。今に至り百五十餘年。男女の衣被深挿髮の容古
雅なる半。其時の風俗を云々。其の古に画す。てい初る。又深挿髮。深
挿髮。髪。の。深挿。年々。月々。か。その。之。予。先。米。の。思。致。る。事。ふ。古。代。の
婦。人。に。風。俗。を。二。三。画。と。出。り。移。時。代。を。か。つ。風。俗。深。挿。髮。の。よ。り
華。り。た。る。俵。を。要。し。馬。く。信。目。梓。紗。を。ん。と。終。之。一

○正月小児の弄戯小男児を毬打し。女児を絲毬羽根紙けを正月乃
紙ひきとれ

○毬打を頭懸神中抄云。十節祭を黄帝。蚩尤が頭を収。是。毬。今
の。毬。杖。を。り。彼。例。と。り。漢。土。年。姑。に。件。の。事。氏。用。由。國。中。画。事。ふ。後。に
日。本。國。其。例。を。ま。で。毬。打。と。打。と。り。世。渡。同。言。も。又。蚩。尤。の。こ。と。澤。り。
續。日。本。紀。云。聖。武。天。皇。神。龜。四。年。正。月。救。王。子。諸。后。の。子。等。と。春。り。花

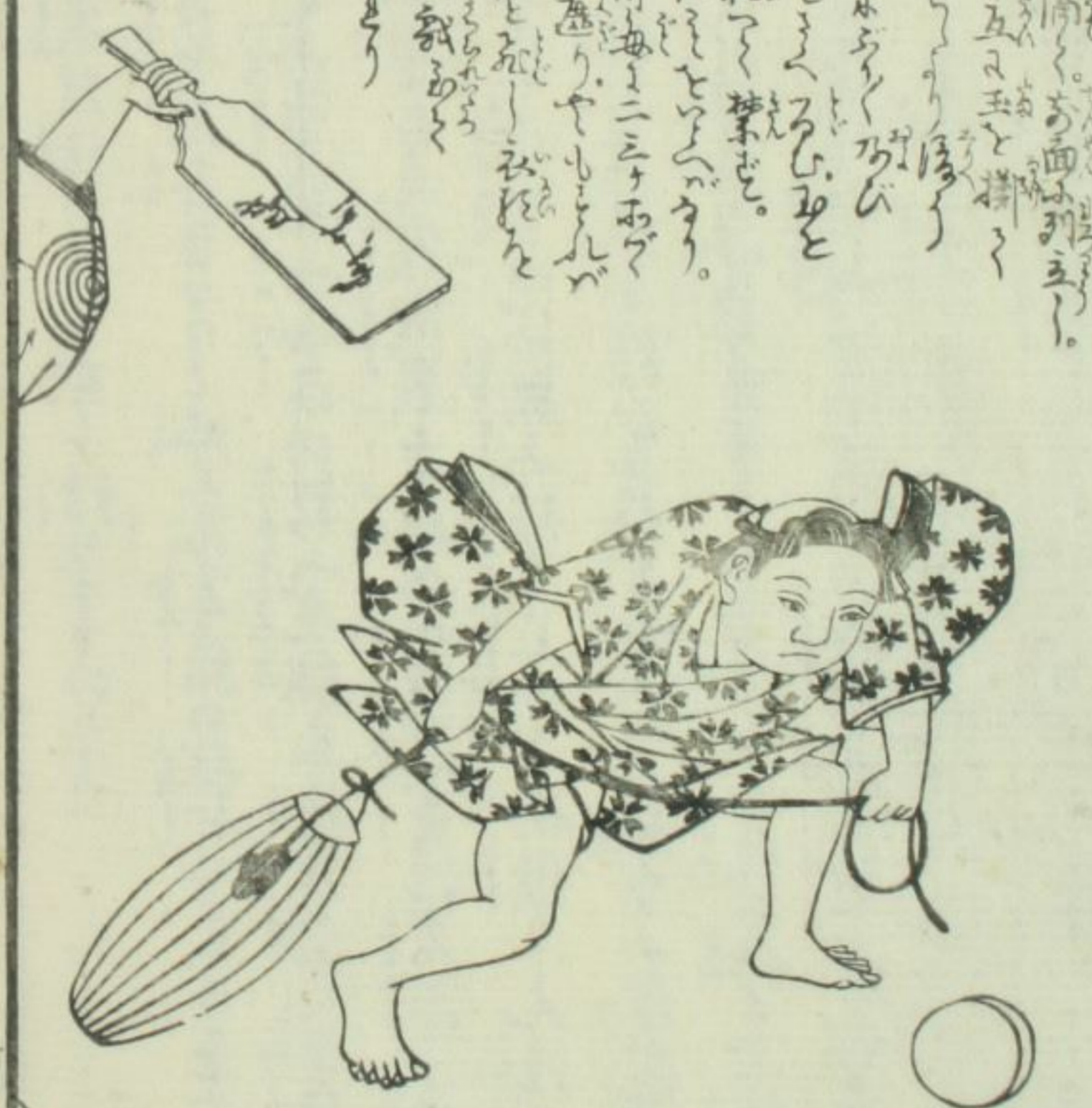
小集のく打毬の樂代修りまゝなり

滑稽雜抄云。万葉に玉きつりと詠る。年姑の毬打と云。日本小集の
て送る。近頃より之必竟今世女子の好ぶ。毛毬。身。辺。に。老。者。若。の。本。毬
を。本。毬。い。か。り。と。後。成。恩。寺。殿。の。世。渡。同。言。に。本。丁。と。拵。ざ。れ
と。其。頃。も。本。毬。や。唯。男。児。の。好。ぶ。拵。と。石。回。小。擲。便。る。ん。後。鳥。羽。院
の。雅。き。四。時。に。神。介。毬。打。紙。好。む。紙。ひ。され。又。是。上。人。故。あ。り。て。拵。の。と。り
拵。立。て。は。帝。代。毬。打。の。習。者。と。罵。ら。せ。ら。る。や。平。家。お。流。あ。け。り。又。俗。に。拵
と。稱。して。毬。打。拵。と。の。り。毬。杖。と。云。の。あ。り。杖。の。先。は。付。り。もの。古。代。の。古
來。の。擲。楯。小。集。に。二。三。歳。の。幼。兒。身。が。た。毬。打。と。紙。と。又。を。後。夜。に。紙。に。拵
急。拵。行。を。送。り。其。代。毬。打。小。集。と。稱。し。其。餘。を。玉。拵。と。云。い。即。ち。若。の
ふ。ま。ら。る。非。け。り。の。事。も。本。丁。と。拵。と。云。今。玉。拵。と。云。い。即。ち。若。の
毬。打。や。其。好。む。と。本。丁。小。集。の。事。と。宝。皇。の。内。れ。せ。ら。り。お。の。ど

寛文二年清水寺は堂に掲げ正月途中路上の早
初編に如くとも字の交りてる所有てなまふ抄也

○は誠也正月元日初日。正月申男児たち
立引也其方み六より隔く。あ面ふ列主い。
うくくに増る玉と祝し。五玉と掛く
猪若と縁ふけ玉列主や。うりほ
おる。然とく猪とけかおるく乃び
よの。おと破く。おとをさる。おと
ちく。御う天玉と祝て。禁也。
おと。おとにやう。おと。おと。おと。
け誠也正月申男児一町海二二三町
やどりて。年徒のたを。おと。おと。おと。
玉。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。

○一脱ふ羽子板を
神功皇后の御板と
稱して女児の祝とに
よふく。おと。おと。おと。おと。おと。おと。



けりあま色羽子板の
うの足利家竹代
其名もさる。
まゆとあらん

○加鬼板のし異國よりけ誠
あつて。おと。おと。おと。おと。おと。おと。

○羽子板のまをたてたは家ぶの。おと。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。

○羽子板胡鬼板とも呼ぶ
く。おと。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。
おと。おと。おと。おと。おと。おと。



元非

比六

松子

三子



△ 松の葉を束ねて
 白布の巾着に
 詰めしりしを
 産州府志しりし

ふり白巾着
 背お倉いぢん
 と唱つる侍さう
 誠の心を身を通の
 けいふさう

まはは家と意あは
 まのあしりふま
 けいさう



女の赤ん坊とて古代のと由なり。さうしていつのまにか
 紅晒の巾着。今も北山家の婦人いりし。此の巾着の
 神代や。紅晒の下女を。皆これをして。さうしてこの保撰
 紅晒の巾着とて。必用とて。必用とて。必用とて。必用とて。
 賢直。寛永の頃。嫁入り。さうして紅晒の巾着とて。必用とて。
 竹入。あまの娘とて。嫁入り。さうして紅晒の巾着とて。必用とて。
 松の葉を束ねて。白布の巾着に。詰めしりしを。産州府志しりし。

○九月より十月に。或は五葉の松を。採りて。白布の巾着に。詰めしりしを。産州府志しりし。

○も通の松の婦人編りしを
 採りて。白布の巾着に。詰めしりしを。産州府志しりし。

て法論代轉んて頑ふ其次々奪取金剛となりて千兄の教を渡らん

○法書に引取の経説大由異同あり。今寺門のた石に在る二王の像を

○相傳ふ泰始皇の時天竺空利房等の沙門十八人來て長安よりふ

○因ふ今寺院の門に金剛力士乃像を至神法の門に赤黒の袍を著し

○法馬小國よりふカ士ウカを執り我を魚く此庭我二人お討一寺代組

○船之圖

清水寺奥院

寛永十一年

小村忠清画

古本銅漢土天竺乃各船互小渡海して交易と為凡大内家大の國は

一船泉州堺より伊豫屋船一艘京都より南倉船一艘

伏見屋船一艘渡海は天文二十年大内家絶て後勘合の御共て大船乃

○清水寺奉堂は掲る船倉船の國末古船乃品又奥院にも末古

○奉堂の外障北面に掲る船乃法馬寛永十一年東京船南倉船

三絃と水滸年中流球團より流る。之既は以用の奉納の草と換用の息吹
 埒の音人中の妙く作り其流虎以とて盲人奉納。彼れとひき姑む奉納法年う
 出されハ思々

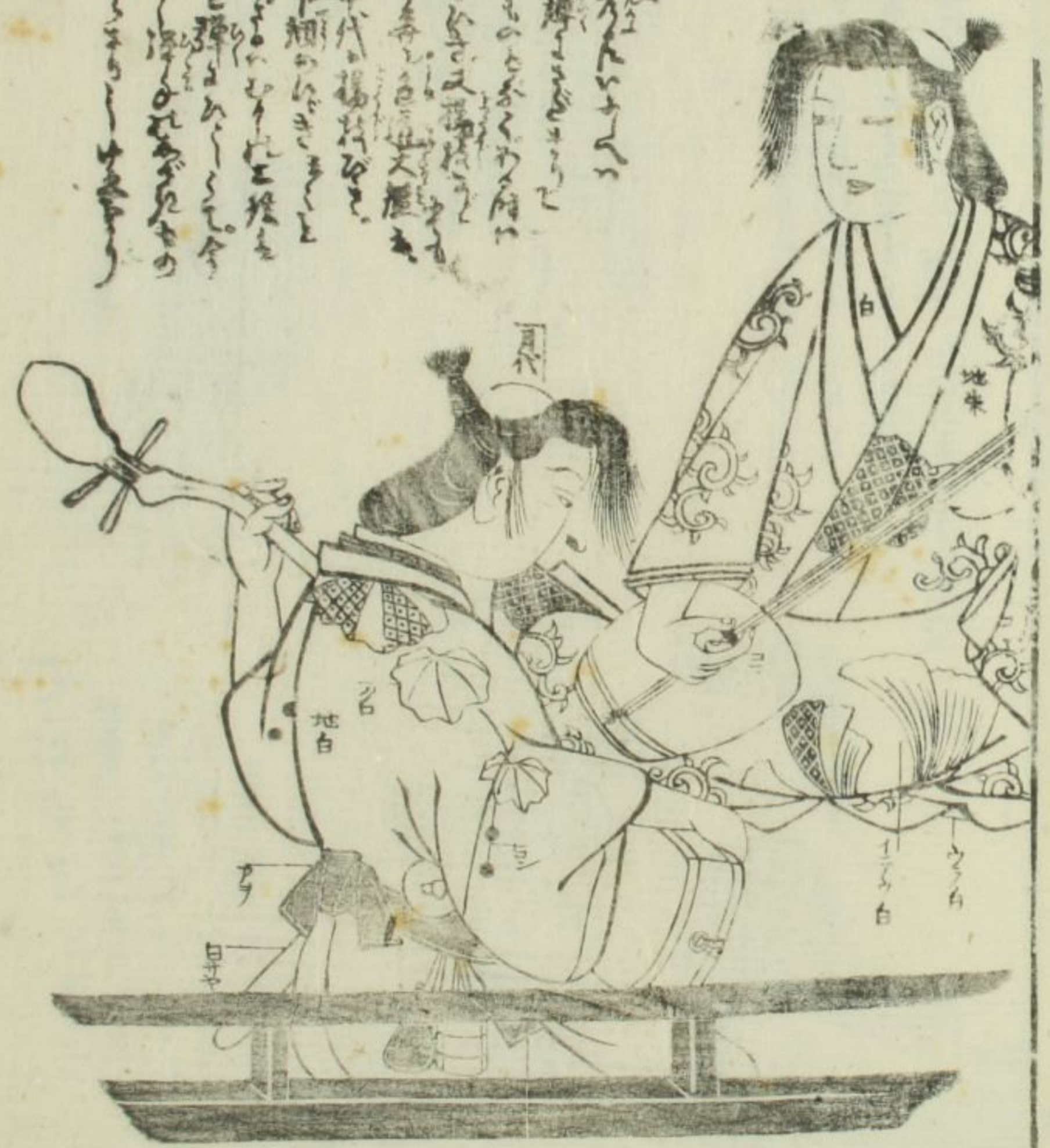
。物の上お方と海老尾より多びの尾は何れよりハくホミテ實永水滸の流
 ハ三絃の装束異して海老尾流球より反首のてく。今ハ装束のて法と見バ
 トに團よりホミ實永十一年の流く。又兼意年。四葉河系又流り團紙團ホ
 けりれの流馬ホミカのてれ之流あり。接ぎに其頃留め時の装束ありて
 け。是流球よりホミホの装束の流り。ハ後の方と流り

。お海ホ出に流氷寺實永十一年奉納の國中細画して分曉され奉と
 を交に抄出してい。ハ考紙流き



白

此圖を考たいハハハ
 三絃と水滸年中流球團より流る。之既は以用の奉納の草と換用の息吹
 埒の音人中の妙く作り其流虎以とて盲人奉納。彼れとひき姑む奉納法年う
 出されハ思々



白

△ 義亮の園には水寺に掛くる所のはらうとてよき草

正保四年の忍びの母

宋書五行志云 晋の威寧
大康の時に 女をいりて
五雜組云 男色の良き
顔童に比ぶるの戒あり
上右に御まを 晋に至りて
大盛りて 京師乃男子
唐宗より己に
小唱あり
縉紳の酒席は
供し 官伎殿は



西ノ下

棟まれも 明初も盛
うは 中世も天正より
義亮の園には水寺に掛くる所のはらうとてよき草
や 其頃乃成 老人の犯
男との事ハ 池に
出立マ 妹と坊
サ 其の決まらぬ
切



或は風流画にもよく
清水寺に描く猿馬
おもてふぬ。女まよ
減らるは清
いよを流るより。
今も終る其し
かゝらいつてやまを死
こしかり



傳云都良香は都腹赤の子なりて當時乃美才儒ありて文人あり菅原
相模廣相巨勢文雄等と上下の激論あり。清和帝に仕へて桂下は
翰林にありて元慶三年小政に治ま本約を成るは乃美才儒に在り。其
後人良香は乃美才儒の完く見ざる者あり。世に傳ふ良香は富士太史に
入るは乃美才儒の完く見ざる者あり。世に傳ふ良香は富士太史に

○古老説云良香武時氣霽風梳新柳髪とらる句は乃美才儒の作
下の句は乃美才儒の作。羅生門のあはれとらるに鬼樓上とらる聲と。氷清浪
洗旧苔鬚とらる下の句は乃美才儒の作。良香は乃美才儒の作。菅原相模とらる
詩は乃美才儒の作。いよを流るは乃美才儒の作。いよを流るは乃美才儒の作。
いよを流るは乃美才儒の作。いよを流るは乃美才儒の作。いよを流るは乃美才儒の作。

○此詩朗海集に早春の詩より出でて却良香が作とらる

○詩のまゝ大の都にありて乃柳を吹きびくくらの髪を揺るふ似るや
くわらも原のくくらの髪をあらふは似るや

○蘭亭圖

寶曆四年

池奩名

大雅堂と号し字代成九流と号し又九霞山推
の字と号して唐推と号しは野秋平と号し

蘭亭は漢土紹興府の会稽山あり清流激湍左右映帶一觴一詠足以暢叙幽情
かやあつりとも

○車文類聚別集十二巻云何延之園亭記云会稽山陰之蘭亭
會稽管内史琅琊王羲之字逸少也善如の詩序あり右軍蠅聯の美
曹くそ蕭散の名賞く晉穆帝永和九年暮春三月三日大原孫綽
與公廣漢王彬之并凝徽徵揮之等早有一人衣被復乃後を脩之
毫河揮ひ序を制ともく

○王羲之蘭亭之記云

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭
脩禊也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林
脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐
其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠足以暢叙幽情
是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙大俯察品類之
盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂下畧
今圖を此又を以て画す
○大雅堂と号し字代成九流と号し又九霞山推
の字と号して唐推と号しは野秋平と号し

○仁田四郎忠常斬猪圖

祇園

元禄十五年 海小友實齋画

建久四年五月十八日頼朝卿居士の孫野の掇し時小年旧大猪交四

○ 梶原景季の服之圖

祇園社

三年号

筆者の名代不載 画之考初梅は起るべきなりと考

元暦元年二月、頼朝卿の代官として北頼義經、播磨に發向し、平家宗統の第一の谷汲責。時、梶原平之景時、其子源を、系季、平家系高一陣、前進し、中、平次、系季、

武士のせりけり、梓弓引て、人、此、之、は、もの、

と、海、一、城、戸、口、近、く、押、寄、り、て、戦、ひ、の、各、れ、城、を、屈、竟、の、要、害、と、し、生、田、の、杜、代、一、の、城、戸、と、三、方、に、惶、を、極、東、の、方、に、引、移、架、し、我、を、も、お、く、運、兵、本、を、川、の、上、り、控、衛、し、南、の、海、陸、を、控、指、控、て、校、同、以、的、一、只、用、と、し、六、城、戸、を、入、海、死、中、も、お、く、陣、中、より、防、ぐ、ま、ぬ、武、藏、國、の、住、人、河、原、を、即、日、二、郎、兄、弟、友、田、之、郎、吉、次、等、射、倒、し、人、見、聞、も、討、ま、ぬ、梶、原、を、津、進、と、運、兵、本、破、り、源、を、系、季、以、具、し、も、城、戸、の、中、に、引、入、り、

○ 平家物語の梶原平之景時、二年、村、を、子、と、て、又、の、年、に、又、の、原、を、同、と、弁、侍、と、り、梶、原、五、百、餘、騎、大、勢、乃、中、一、萬、人、と、

城、戸、の、中、に、新、中、納、言、是、子、年、と、後、中、將、が、二、千、餘、騎、梶、原、五、百、餘、騎、取、圍、み、戦、ひ、梶、原、勢、を、破、り、て、綱、と、引、源、を、系、季、と、引、渡、し、款、乃、中、に、圍、ま、し、ぬ、系、時、を、以、見、く、原、を、必、定、討、と、り、今、の、生、て、何、と、せ、ん、と、さ、び、城、戸、を、責、て、入、り、此、時、源、を、系、季、と、り、系、地、之、郎、高、保、と、戦、ひ、境、を、も、お、り、源、を、大、量、と、り、二、十、餘、騎、を、取、込、り、し、菊、は、首、を、討、ち、去、り、方、の、生、を、も、さ、り、費、れ、く、お、ん、と、て、又、よ、を、系、時、を、原、を、お、ぬ、城、を、に、極、く、守、り、て、城、戸、を、お、も、す、是、以、て、梶、原、二、度、の、懸、と、し、待、款、及、強、を、公、取、の、り、て、あ、を、ひ、この、極、を、武、士、乃、い、と、り、敷、き、れ、綱、を、ぬ、ぐ、れ、ち、し、も、梶、原、を、も、別、人、小、指、は、姫、と、り、道、を、侵、り、て、喧、亂、と、り、梅、枝、を、朝、孫、お、も、く、を、指、たり、さ、ら、梅、乃、花、を、教、え、ね、も、香、を、社、を、指、り、と、り、吹、風、を、お、よ、い、し、梅、乃、花、を、お、ま、ま、わ、り、と、り、香、を、さ、す、と、り、と、り

の道あり餅の香気臭ぐ鬼を奪り道程の誠とく意を疎にかけ
半瓜作らう。狗狐一名吼噓と云
押漚と云はれ其程云に後醍醐帝元徳年中。岡基。桃原。和尙。檀那。
南の庄。女梅寺と云ふ。小梅氏と云ふ。小梅寺と云ふ。後少の御前と云ふ。
播磨。耕雲菴。乃任。伊代。伯耆。主と云う。法守乃。楢原の。神を信じ
毎日に法施をなす。或時。社。の。遠。や。こ。ま。の。狐。を。ゆ。り。於。こ。の。て
長。言。は。此。狐。と。云。う。靈。あり。て。夜。に。修。ひ。く。は。狐。を。追。逐。を。防。ぎ。ま
然。の。凶。を。告。る。此。狐。乃。子。孫。今。小。寺。内。に。住。と。う。又。此。狐。は。夏。を。程。云。ふ。後。乃
吼。噓。と。稱。し。又。狗。狐。と。も。云。ふ。彼。狐。は。威。威。と。行。て。大。威。威。が。程。云。ふ
と。懇。懇。と。其。性。と。程。云。ふ。程。中。狐。の。お。狐。佛。乃。骨。髓。と。意。く。口。傳。せ。之
忽。然。と。て。去。る。是。より。大。益。益。妙。を。得。く。此。狐。言。は。れ。ゆ。く。家。の。大。事。と。は
道。不。達。し。ぬ。道。の。奇。特。と。あり。と。云。う。

○玄中記云。狐五十輩として。能く。變。化。し。て。百。歳。して。又。女。と。な。り。林。亞。と
す。又。丈。丈。と。な。り。女。子。と。交。接。し。千。年。して。能。く。千。里。乃。年。を。知。る。
即。之。と。通。じ。て。狐。
本草綱目云。狐。狐。と。云。う。黃。乃。狗。小。似。く。鼻。尖。り。尾。を。日。の。穴。に。伏。し。て
い。ゆ。く。食。以。寤。む。又。嬰。兒。の。と。く。氣。控。く。臘。奴。其。性。疑。ふ。疑。ふ。と。は。な
び。く。金。頂。と。云。ふ。故。に。狐。の。字。狐。は。修。正。に。疑。く。字。不。疑。く。な。す。捕
者。ま。置。を。用。蓋。妖。獸。と。く。鬼。乃。乘。と。る。如。く。三。種。あり。其。中。初。う。て
小。狐。は。後。乃。り。黃。黑。白。の。三。種。あり。白。を。在。る。者。を。稱。す。尾。小。白。淺。文。あり
者。亦。佳。之。其。腋。の。毛。純。白。是。乃。狐。白。と。謂。ふ。其。毛。皮。表。亦。白。く。狐。毛。を
と。ぬ。る。首。に。狐。と。水。と。種。或。云。狐。は。媚。珠。あり。或。云。狐。百。歳。に。至。ら。ば
北。斗。の。禮。と。變。じ。て。男。婦。と。交。り。人。を。惑。は。し。又。狐。尾。を。割。り。て。と。う。く
火。を。出。し。交。る。狐。野。狗。と。畏。る。千。年。の。老。狐。も。千。年。の。枯。木。に。似。て。好。思
と。云。う。真。形。を。見。し。つ。ら。く。

○信濃國酒造り湖をよみし水伝ふ付小狐事々其水の止ぬるを
を早降りしと云ふして後人馬水の上を通りて狐溺るる故に人
物乃上代通るは是を祀るるに水原に湖中に溺るる云々
又狐水のこと海に是より人馬の命を止むる毎半ありと云
七石里の其一つ

○幸ね狐酒造り唯伊勢土佐阿波諸國の四國小狐一凡狐を
百早河原のものを一人間の信を結ぶ大和流の奔道に小狐
の神を信濃の郡に人とり相傳ふ狐を指すの神にたり。又
香くふ城乃指す社より人指すの社と建く狐をある其か
下の者も佐傳ふ異なり。按ふ小指す社倉箱鬼の神と云
按社の中白狐専女の信狐は是は伊勢流國乃狐を指すにあり
とらるる土の君に到るるに家信狐を人の口に結ぶ
○又武石王子指す河社より十月廿日祀は伊勢の狐を
○凡狐事々時と声鬼の啼が如し。狐の時をさすを性
然るは又く狐を祀ふ思代狐は小至狐は其を祀ふむと
はるは又く狐を祀ふ思代狐は小至狐は其を祀ふむと

○占出山 祇園

元禄十六年 河合翰雪画

○占出ふと六月七日祇園會に出れぬのふり。屋基のとに神功白
后玉真川や難代釣糸偶人をとる

○神功皇后の氣長足姫尊と号し仲哀帝の皇后なり氣長宿禰
の女母代葛城高額媛と号し幼く聰明叡智あり。猿容状麗く帝九

と平小崩は皇歳十月皇后之韓を征伐し終えも肥前乃國松浦の玉
鳩の里乃小河の石上より針を匂く釣糸。粒を取て針は裳の糸と抽て

緝つかして釣を投て祈て曰。朕西方財乃國求んと欲ふ若事代成を
こゝろバ河の魚飲釣糸と羊を奉て細鱗魚を獲終ふと

○武吉老の法を傳へてアイワイ女郎ふり。桂川の禊師まは難代
細い婦も難代市小賣小難ワイくと云ふ其乳を造りて出せしが
水干。立鳥帽もとるして神功皇后玉真川より魚を獲るは難代
アイワイ女郎ふの名を授けり

○祇園會の夜をト部抄云。貞觀十八年今歲夜神堂を依て奉祀の
外より。梶祖日良麻呂京中の男女次引く。六月七日十四日。夜神を祇園
送り送り。おまふ年六月七日斯のやうにわけ。是代祇園會と云。其神樂
を置ぬる八坂の御威神院より小寺と

○今祇園御靈會に風流の山鉾あり。六月七日に出れば八箇不八箇不十四十四
長刀鉾。柔水鉾。月鉾。鶴鉾。夜上鉾。水鉾。傘鉾。二箇不

○并は函谷洋あり。天の系火の流いまで出たり

天神山。西教天神山。占歩山。太子山。白樂天山。破琴山。郭山。山鉾と
本城山。盃山。葎山。蟻螂山。從昌山。皇山。山鉾と

同日に出れば洋一箇不。九箇不。所澤。葛志。慶山。黒山。洋山。
仍者山。鯉山。鈴麻山。八幡山。親音山。二箇不。鷹山。山鉾と

○横江。小良。日良。廣。三。中。の。男。女。と。引。く。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
その傘鉾と云ふに。先にお祭を載と。鬼面と載り。お祭の二人より。

次小兒幣。其法より。夜を依て奉祀の
後。是れ送り。俵と云ふ。又洋も傘鉾の一箇不。あつて古國
と云ふ。小良。日良。廣。三。中。の。男。女。と。引。く。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
杖笛。り。新。あ。り。は。新。杖。を。引。く。者。の。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
鉾。は。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
此。法。を。依。り。て。古。國。と。云。ふ。所。者。の。山。鉾。と。云。ふ。事。あり。六月。七日。者。の。山。鉾。
小物。を。公。に。さ。す。又。其。傘。鉾。と。引。く。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
踊。躍。は。ん。と。安。良。日。良。廣。三。中。の。男。女。と。引。く。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
乃。あ。つ。て。夜。神。の。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
乃。年。の。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
乃。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
乃。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。

○古(出)る。洋。六十六。年。山。百八十四。あり。と。云。ふ。又。素。往。未。祇園。御。靈。會
乃。素。に。云。ふ。時。定。洋。又。舍。人。並。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
送。る。夜。神。を。送。る。夜。風。を。あ。ら。せ。り。に。出。る。
是。文。安。文。明。の。時。代。の。山。鉾。の。山。鉾。と。云。ふ。事。あり。

礼を後乃山坪の箇下明慶九年乙坪の箇下の古文書あり。祇園會
乙坪の事へ近頃孫田貞宗通称近江守の撰。増補祇園會細記
四巻の著して事多きを得て終へ

○八幡を即之圖 祇園 支那の神を祀り
めしむる事

○玄宗揚貴妃之圖 祇園

寶曆十二年

狩野絶殿助水良画

○揚貴妃と蜀州の月戸揚玄琰と女小字と玉環と玄宗皇帝
第十八の皇子壽王の妃とあり。玄宗皇帝と壽王の官人出で女真
宮に納むる。寵愛をく。天寶十四年安祿山が乱およぶ。帝貴妃
と乱に避て蜀州に逃れし中。徐馬鬼が驛をく六軍に絶はる。禍ひり
揚國忠が亂をく。國を亂し。妃と縁あり
扁額軌範五之卷大尾

津逮堂藏版

京都市三條通御幸町角

吉野屋 大谷仁兵衛

